風景の会

志としての「風景の会」

＜縁して出生＞
グループ「風景の会」を名乗ったのは今から18年前になる。
学生時代、自然保護や郷土研究に多少首を突っ込んでいたこと、職場にハイキングや植物好き、写真好きの人が多かったこと、等から、それら趣味ぽいものも包含した若手勉強グループを結成することにした。
そこで公園内の植物調査、それも埋め立て地の帰化植物を独自に調査しているT君にまず誘いの声かけた。何かしようという思い、趣味も近いものがある。口説いて二人で「風景の会」を設立。日比谷公園の片隅で産声あげた。T君の「途中で止めるようなことはないでしょうネ」これが産声だったと記憶する。

＜移ろい漂泊＞
グループ活動として、まず、T君の関心のあった身近な場所での植生調査から始めることにした。現在ではカワウで見るも無残な姿となっている浜離宮庭園鴨場付近の植生調査である。立ち入り禁止区域もあることから、職場上司への交渉から開始。いよいよ本格活動をと意気込んでいた矢先、思いもかけぬ異動内示。
これから私の漂泊のような異動が始まる。T君もしばらくしてから小笠原支庁勤務となり、活動は完全に休止状態、解散状態となっていった。都市の輝きと翳り、生と死、家意識、等々。
急き立てられるように自分の考えるところを吐き出させられたような10数年であった。

＜老いて開眼＞
自分が何かスポイルされそうな状態の中、一昨年、(財)東京都公園協会に。ここは進取の気概があり、身近なイベント等通じての公園の活性化企画、技術職によるプロジェクト型研鑽、職種を超えた同好会活動、等活発だ。 そして、若い人も多い。風景の会をつくった当時の公園職場にも似ている。

そんな折り、自主研究グループ募集のfaxが舞い込んできた。そうだ、都政への関心、若い人との交流等、こんな外郭団体にこそ必要だ。そう、若いときの思い、風景の会で求めていたもの、当時湿式の複写機で写し出した会の趣意説明の文字はいまは色失せても、今でもその志が自分にはあることがわかった。
未練断ちがたくあるのではない。時機を待っていたかのようにある。老いて開眼。そう思わざるえない。いやせる。勇気を持って参加してくれたT君への感謝の思い。いまこそ立ち上がるべきだ。

＜型なき風景＞
自主研究グループ登録。代表を表明。自分なりに当グループを企画・研究的存在として位置づけ、思考実験する場とした。
この発想・企画を仕事や、職員親睦、くらしの場・地域へ反映させるべく、公園現場を活かした自主研究(避難広場としての公園管理のあり方を東白鬚公園を事例に調査)の他、場に根づいた植生管理計画の検討、ハイキング部の結成と企画提案、地域活動としてのPTA等で主体的に活動。
実に私の個人的な動きにもとらえられるが、底流には常に私の中の公意識、風景の会の志を保てるよう努めた。

今後の会の活動方向としては「公園をフィールドにした自然教育」を主軸とし、会員のそれぞれが自分の場でその人らしい活動ができるよう側面的に応援していくことを心がけたい。地域に根ざした活動をめざす同志の啓発の場でありたい。きっかけづくり、縁結び的性格の組織をイメージしている。固定した型ではなく、受け止めの器として、そして可能性の揺籃として、創発的組織を皆で模索したい。

月光の下、うねりに浮かぶ木の葉のごとき存在の会ではあるが、志ある者があ力をあわ せ、地形をなぞり、道すじ、水みちを探り歩き、峰向こうの曙光を皆で眺め見たい。そし て、返り見て移ろい行く影とともに一献交えたい。
（1997.4.1 都政新報）

活動報告

この写真は3月18日職場の自主研究グループ発表大会の際、「風景の会」主催の「臨海部施設見学会」に参加いただいた方々の集合写真です。23区、多摩、島嶼から50人弱の参加いただきました。無名の本会の企画に参加いただき本当に感謝しています。ここに参加頂いた方々一人一人を大切に、今後も意見交換させていただければと思っています。本当にありがとうございました。
（1997.4.1 都政新報）

BACK < > NEXT